

今後への期待と展望

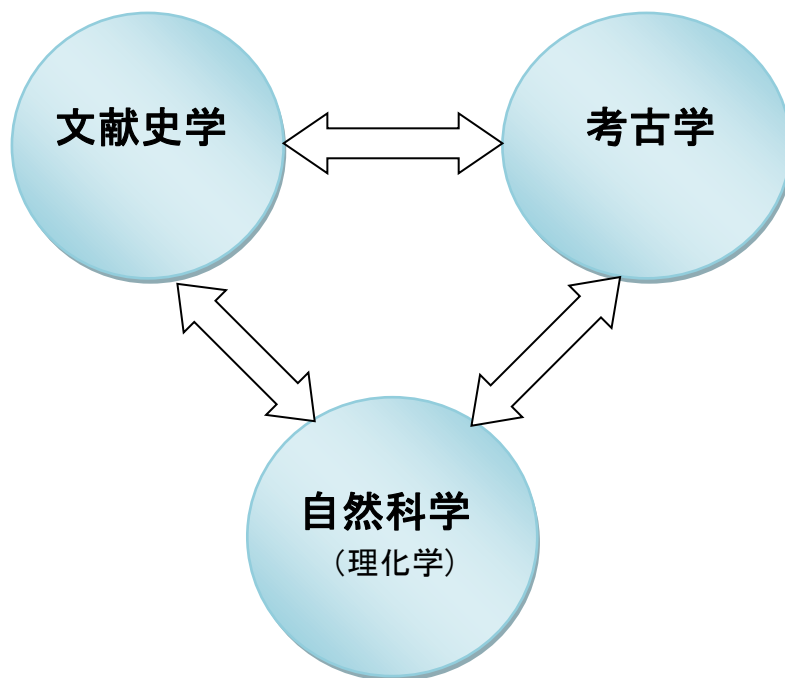
鷲崎弘朋

2014年10月5日 全国邪馬台国連絡協議会「第1回全国大会」会場：明治大学
大会テーマ「科学的年代論で解く邪馬台国」での講演資料

I 文献史学、考古学、自然科学の三本柱（トライアングル）

従来の邪馬台国論と古代史研究は、**文献史学**と**考古学**が中心であった。邪馬台国についても、明治43年（1910年）の白鳥庫吉（東大・九州説）と内藤湖南（京大・畿内説）による魏志倭人伝など文献からの論争以来、100年を経過したが未だ決着していない。

明治・大正・昭和時代は、文献からの九州説が優勢であった。平成時代となり、最近の約20年は考古学からの畿内説が有力となっている。そして、「箸墓＝卑弥呼の墓」説がマスコミを賑わしている。しかし九州説からの反論も根強く、また他の諸説も入り乱れ、このままでは「親魏倭王」の金印でも発掘されない限り、最終決着は望めないように見える。では、どうするか？



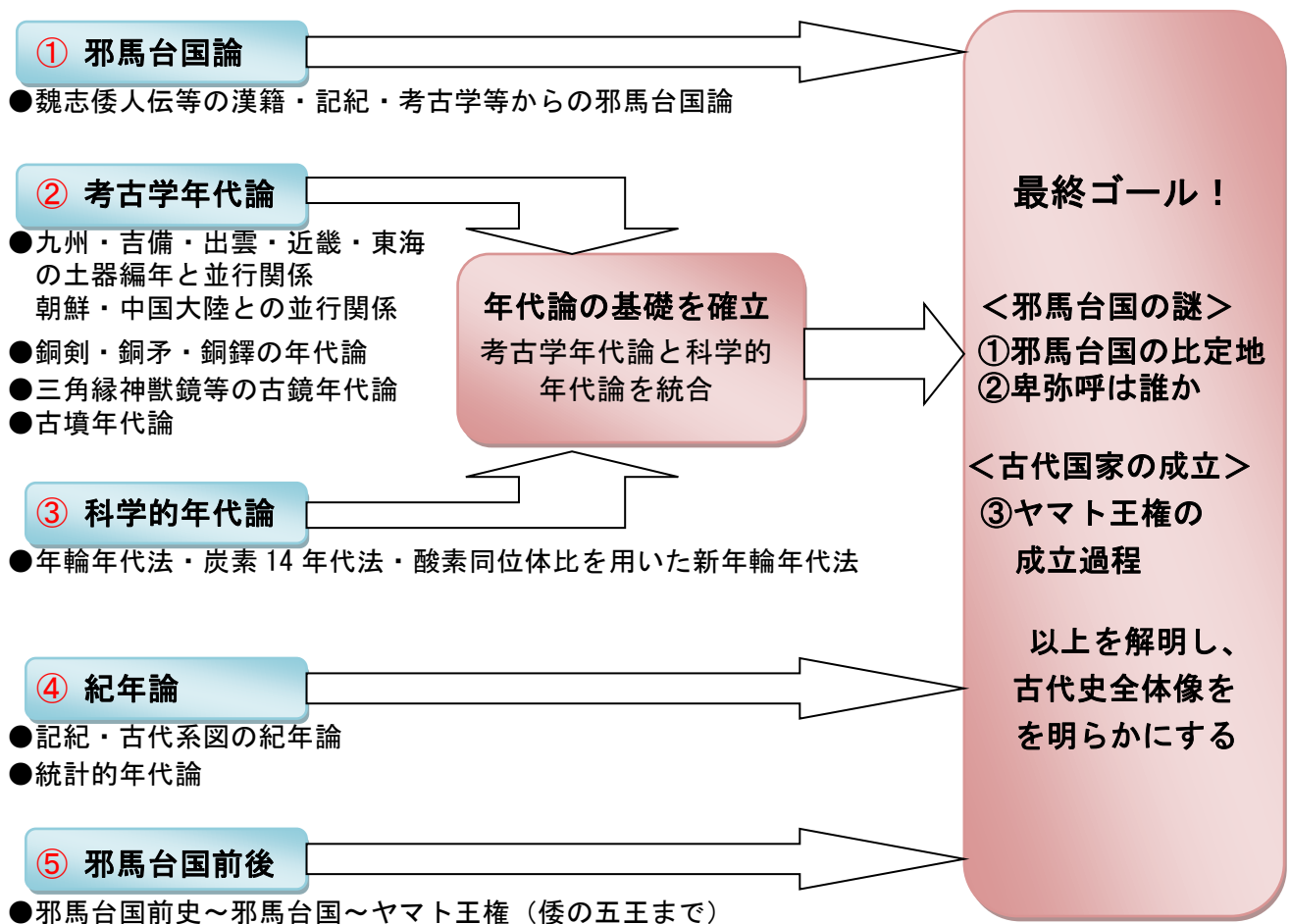
そこで登場するのが**自然科学（理化学）**である。これには、「年輪年代法」「炭素14年代法」「酸素同位体比を用いた新年輪年代法」「鉛同位体比分析」などがある。もちろん、これらは今までも古代史研究に活用されてきた。しかし、必ずしも主役ではなかった。今後は、この「自然科学（理化学）」を「文献史学」「考古学」と並ぶ主役、すなわち三本柱の一つに据える必要があるだろう。そして、**三本柱をトライアングル**として相互補完、相互チェックし総合的に検討することにより、**真の古代史解明**が初めて可能になると思われる。

Ⅱ 科学的年代論を古代史説明の突破口に！

科学的年代測定法により遺跡・出土物・古墳に実年代を付与出来れば、古代史説明が飛躍的に進展するのは間違いない。邪馬台国と古代史説明の突破口になると期待される。

現状の邪馬台国論と古代史論は、研究者間の年代観の開きが大き過ぎる(約100年の差)。これでは、違う土俵で議論していることを意味し決着しない。そこで、**以下概念図**のように「②考古学年代論と③科学的年代論」を統合し、まず年代論の基礎を確立する。

「①邪馬台国論④紀年論⑤邪馬台国前後」は、各研究者の論考を深めると同時に論点の違いを鮮明にしておき、年代論との最終的統合に備える。



【参考】中国での古代年代論プロジェクト『夏・商(殷)・周断代工程』

中国では、記録が乏しい夏・商(殷)・周王朝(BC2000～BC771)について考古学、炭素14年代法、文献学、天文学などを総動員し、国家プロジェクト『夏・商(殷)・周断代工程』が実施された(1996～2000年)。

これにより、周の武王が商(殷)最後の王である紂王を滅ぼし、周王朝を建てた年がBC1046年と断定するなど大きな成果を挙げた(周王朝成立について、従来はBC1130～BC1018年の間で44種の説が存在していた)。

Ⅲ 専門家・大学・研究機関と全国邪馬台国連絡協議会との関係

1 インターネットの発達で、最近は在野研究家（アマチュア）も専門性の高い情報・資料が入手できる時代となり、アマチュアも雑誌等での論文掲載や大会での発表、本の出版、場合によっては学会での発表も行われている。

しかし、専門性が極めて高い分野、例えば年輪年代法・炭素 14 年代法・新年輪年代法、また三角縁神獣鏡の鉛同位体比分析等は在野研究家はなかなか手が出ない。これは、理化学的な測定分析および設備、また相当な分析費用が発生するからである。ただ、これらは古代史解明の決定打となる可能性を秘めており、当会としてどのような支援・取組みが可能か検討の必要がある。

2 例えば、試料を保管者から借り受け専門家に測定を依頼する。具体的には、

① 纏向遺跡の桃核（桃の種）

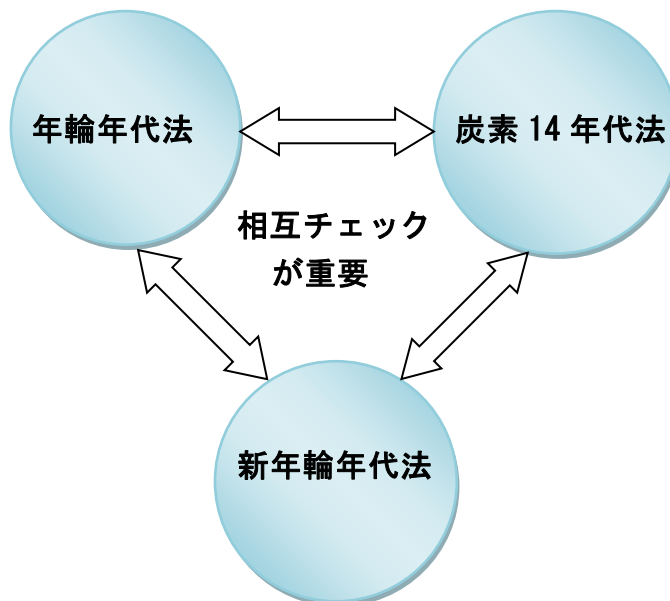
2010 年に纏向遺跡から出土した桃核（桃の種）2769 個の炭素 14 年代を測定する。

「桃核」や「くるみの種」は硬質で汚染（コンタミネーション）を受けにくく、炭素 14 年代測定に適し、正しい年代（ピンポイントでは無いが幅として）が出ると言われる。これは、土器付着炭化物が汚染され易く実際より古い年代が出る傾向であるのと違う。

桃核そのものは全国の遺跡から多く出土している。ただ、纏向は卑弥呼の王宮の地か？と騒がれており、この桃核は早急に測定したい事例である。

② 遺跡等からの出土木材

木材は「年輪年代法」「炭素 14 年代法」「新年輪年代法」で同時に測定可能であり、今後の期待は大きい。ただ、いかに科学的測定法であっても、単一手法だけに頼るのは危うく、異なる 3 手法での相互チェックが重要である。



従来の出土木材では、例えば池上曾根遺跡大型建物跡の柱根群 17 本、纏向石塚古墳周濠出土 100 点以上、また勝山古墳周濠出土 200 点以上がある。この中で、年輪年代と炭素 14 年代が両方測定されたのは、池上曾根遺跡の柱根わずか 1 点のみである（1998 年：国立歴史民俗博物館の炭素 14 年代測定）。これら木材について、異なる 3 手法での測定を実施するのは検討の価値がある。

もう一つ重要なのは、測定事例数を増やすことである。遺跡出土の木材や木造建築物は、新材使用だけでなく古材使用の場合もある。もし、古材使用であれば遺跡や建物の年代とは一致しない。また、測定（照合）ミスや標準パターン（年輪年代）・較正曲線（炭素 14 年代）そのものの問題も有りうるかも知れない。このような危険性を除去するため、出来るだけ多く測定する必要がある。更に同一木材を「年輪年代法」「炭素 14 年代法」「新年輪年代法」で同時に測定し相互チェックを実施すれば、誰もが納得する木材また遺跡の年代を総合的に確定することが可能となる。

ただし、これら多くの測定を実施するには多大な費用が発生する。このため、今後、「科研費補助金」プロジェクトという国の支援策が必要な場面も有りうるであろう。

③ 鉛同位体比分析

前漢・後漢・魏晋朝時代の中国本土出土古鏡および日本出土古鏡（三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡・内行花文鏡など）の鉛同位体比分析を行い、日本と中国での同位体比の違いを明らかにして、三角縁神獸鏡等の産地推定（国産か舶載か）および年代推定を行うプロジェクトも考えられる。従来、古鏡の鉛同位体比分析は全て日本出土の鏡が対象であった。中国本土出土のこの時期の鏡は一枚も測定されていないと聞く。ただし、これは日中合同プロジェクトとなるため、将来の課題提起としておきたい。

- 3 以上の測定は全て専門家・研究機関・大学で実施されることになり、全国邪馬台連絡協議会として直接的には手が出ない。従って、古代史解明に「新たな道を切り開く」ことを目指す当会として、これらプロジェクトをどのようにサポート出来るのか、またコーディネーター的役割を果たすことが可能か検討する必要があるだろう。更に、これら分野の研究が古代史解明に極めて重要だとの世論形成を行い、プロジェクトを後押しする事も重要である。

このように、当会がプロジェクトをサポートし、コーディネーター的役割を果たすためには、「世論を動かす」ぐらい大きなパワーを持つ全国組織を目指して行きたい。本日の第 1 回全国大会をスタートに、「新たな切り口」から邪馬台国と古代史解明を進めるため、是非、当会に対し皆様の絶大なご協力ご支援、またお力添えをいただきたく、よろしく願い申し上げます。

以上

(注) 10月5日(日)明治大学リバティホールで開催された全国邪馬台国連絡協議会「第1回全国大会」は、大会テーマ「科学的年代論で解く邪馬台国」と題して以下の5人の先生方のご講演をいただきました。

大塚初重明治大学名誉教授 「考古学から見た邪馬台国」

安本美典元産業能率大学教授 「文献史学から見た邪馬台国」

光谷拓実奈良文化財研究所客員研究員 「年輪年代法と古代史」

中塚武総合地球環境学研究所教授 「酸素同位体比を用いた新年輪年代法と古代史」

中村俊夫名古屋大学教授 「炭素14年代法と古代史」

この講演資料「今後への期待と展望」は、5人の先生方のご講演後に私(鷲崎)が全国邪馬台国連絡協議会の会長として、会の今後の基本的方針と展望を講演したものです。

なお、5人の先生方の講演要旨は全国邪馬台国連絡協議会HPの以下を参照下さい。

<http://homepage3.nifty.com/kojikino-angou/yamaren4.html>